

第 251 回 お茶ノ水の井上眼科病院の井上達二像と井上治郎像

筆者：林 久治（記載：2023 年 10 月 19 日）

（1）前書き

私（筆者の林）は [Random Walks（乱歩）](#) という題名で [偏屈老人（林久治）の気促な紀行文](#) のサイトを始めている。私の紀行文では、通常の紀行文にはない、斜め目線からのご紹介を書くことに拘りたいと思います。通常の紀行文に関しては、既に優れたサイトが沢山ありますので、それらをも引用しつつ、ユニークなご紹介を記載することに心掛ける所存です。

一方、私は日本の銅像探偵団 ([1\) のサイト/](#)) の銅像探索に参加している。私は珍しい銅像を探して、探偵団の団長さんに「ギャフン！」と仰っていただけることを目標としている。ここで「珍しい」とは、「①見つけ難い場所に隠れている有名人の銅像。②市井で頑張って人生を過ごしたが、有名人ではない人物の銅像」と言う意味である。私は自宅が東京にあり、孫達が大阪にいますので、主として東京近郊と近畿地方で銅像探索を行っている。最近、私はネット記事を丹念に調査し、そのような「スクープ銅像」の候補を多数見つけている。私の銅像探索記の全ては、[2\) のサイト/f](#) から閲覧出来ます。

10 月 14 日に私は東京医科歯科大の大学祭を利用して、鈴木章夫記念講堂の入口にある島峰徹像と長尾優像島峰を探した。その探索記を [前回の記事/f](#) に記載した。当日、私は医科歯科大の探索後、近くにある井上眼科病院にも行って、その井上達二像と井上治郎像も探索した。これらは [1\) のサイト/](#) に収録されているが、更に新情報を収集するためである。本稿は井上眼科の探索記である。なお、本稿では私の意見などを **青文字** で、資料の内容などを **緑文字** で記載する。

（2）お茶ノ水の井上眼科病院

井上眼科病院（千代田区神田駿河台 4-3、以後は本院と書く）の周辺地図を、次ページの図 1 上に示す。本図にあるように、本院はお茶ノ水駅前の本郷通りに面している。本郷通りから撮影した本院の写真を図 1 下に示す。

お茶ノ水にある本院は、明治時代から眼科の名医として有名である。本院の銅像探索過程で、私は「本院の創設者である井上達也先生は、私と同じ徳島県出身である」ことを始めて知り、同郷の大先輩である井上先生の人生に大いに興味を持った。そこで、本院にある銅像を紹介する前に、本院の歴史を先に紹介してみよう。

そのために、次のサイトが大変役だった。

[3\) のサイト/1](#)：郷土研究発表会紀要第 3 4 号：板野町矢武 医家井上家について、阿波医史談話会、著者：福島義一

[4\) のサイト/f](#)：眼科：ライバル達の相剋—井上達也と須田哲造—、著者：谷原秀信

[5\) のサイト/f](#)：井上眼科だより（Vol. 76）：130 年の歴史を振り返る写真と年表

上記の 3 サイトなどを参考にして、私は井上眼科病院の小史を纏めてみた。その内容を 3 ページから記載する。

（本文は、3 ページに続く。）



図1. 上：井上眼科病院の周辺地図、下：お茶ノ水駅前の本郷通りから撮影した井上眼科病院

図2上に阿波の井上家・家系図の一部を、図2下に井上達也の写真を示す。

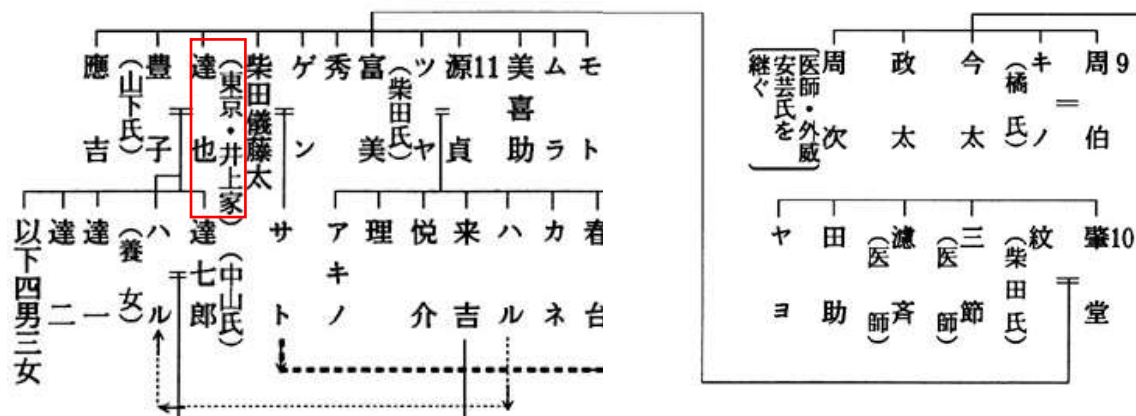


図2.

上：阿波の井上家・家系図の一部（9代：周伯、10代：肇堂、11代：源貞）

本図は、[3\) のサイト/1](#)より借用。

下：井上達也の写真、本図は、[4\) のサイト/f](#)より借用。

井上眼科病院の小史（なお、敬称は不使用）

①江戸時代から十四代続いた医家・井上家の旧蹟は、四国八十八カ所第五番霊場・羅漢地蔵寺の近郊徳島県板野町矢武に現在も残っている。この地に、十八世紀初頭から戦前まで、十三代にわたって井上家が居住し、代々医業を行った（図2上を参照）。この板野を代表する医家・井上家から二人の歴史上の人物が輩出している。それは第十代井上肇堂とその四男井上達也父子であって、肇堂は明治医制によって廃絶の運命におかれた漢方医の存続運動の四国における主導者として生涯をささげた人物であるし、井上達也は近代日本眼科学の開祖として日本医学史に輝いている。

②井上肇堂（1804－1881）は、はじめ医学を阿波国勝瑞の漢方医・橘春庵に就いて学んだが、外科的医学の必要性を痛感して、藩外に遊学。当時最も有名であった紀州の華岡青洲に入門して外科を修め、さらに京都の奥劣齋に入門して産科を修めて帰郷し、生地松坂村で第十代の医業を継いだ。当時の藩内の大部分の開業医師は漢方医で、外科的医療や産科の取り扱いができなかったため、彼の名声は板野郷内はもちろん遠く藩内に知られ、患者は各地から寄り集まり、入門を求める医師は百人に達したと伝えられる。藩主は彼の名声を知って、文久元年（1861年）土籍を与えて藩医に登用し、十九石を給して徳島城下堀裏町に居宅を賜給した。当時の開業医にとって藩医になることは最高の榮譽であった。

③明治政府は、新しい日本の厚生行政の基本として、従来の漢方医学を排して西洋医学、特にドイツ流医制（明治医制と呼ぶ）を採用した。例えば、開業できる医師は西洋医学による医師開業資格試験の合格者または認定した医学校卒業者に限るとした。ところが、明治前半期ころの全国開業医の大部分は漢方医で占められていた。政府がこの制度を強行すれば、全国大部分の開業医は失業することになり、民衆も大変こまることが予想される。

そこで、やがて廃絶の運命にある全国漢方医たちは温知社と呼ぶ医師職業集団を結成して、政府に対して漢方を認めるよう明治医制の改正と漢方医の存続運動を展開した。この運動は東京、名古屋などを中心として全国に広まったが、四国の中心は阿波の徳島済生社で、その代表者は井上肇堂であった。

④井上達也は、嘉永元年（1848年）井上肇堂の四男として、阿波国板野郡矢武で生まれた。幼時から秀才として知られ、十五歳で藩校に入学、十八歳ごろから父肇堂について医学を学びはじめた。明治政府は、西洋医学を採用し、医師養成機関を長崎から東京へ移し、はじめ大学東校、後に東校と称し、はるばるドイツ国からドイツ人教師を招いてドイツ流医学を修めた医師を養成した。明治初年、全国各藩から優秀な人材を募集した。達也は阿波藩から選ばれて、明治三年東校に入ることができた。入学した彼は、わずか二年間で東校医学全科を修得してしまって、その秀才ぶりは学校当局を驚かせた。現在、達也が東校から受領した医学各科の修了証書は、井上家に保存されている。

⑤東校卒業後、達也は東京でさらに医学の研修をすることになり、当時、医学の中でも水準の低かった眼科学を専攻することにした。しかし当時、学校には眼科学の専任教師はおらず、外科学の一部として教えられていた。こんな時期に、達也がどうして眼科学を独修したか？よく分かっていない。明治九年東京医学校眼科掛を命ぜられ、明治十二年医学部別課生教授兼勤、同十四年医学部別課教授嘱託となった。達也は、別課教授であったが、日本人として最初に眼科学を教えた人物として知られる。

⑥1881年、達也は東京都駿河台に済明堂眼科病院を創設。明治十五年（1882年）学校当局の不愉快な措置によって、達也はいさぎよく教授を退官し、病院での診療と研修に専念。この病院は現存して隆盛中である。明治十八年（1885年）渡欧して眼科諸大家を歴訪し、明治十九年帰国した。彼は先進国の眼科を取り入れ、診療のかたわら研修を求める多くの門弟医師たちを集めて眼科研究会をつくって講義を行い、明治二十二年二月井上眼科研究会報告（日本で最初に発刊された眼科学専門誌）を発刊した。彼の手術は神技に近かったと伝えられるが、彼の独創になったものと思う。多数の眼科学書を著述し、明治時代日本眼科学の開拓者として日本医学史上、特記すべき人物である。

⑦井上達也には、長男・達一、次男・達二（1881-1976）、以下四男三女の子があった。後に、長男と次男は医学博士となったが、眼科病院開設時には達也の子供達はまだ幼少であった。そこで達也は、本家の兄・源貞の娘（ハル）を養女に迎え、静岡県浜名郡篠原村に生れの中山榮太郎（1869-1902、井上達七郎と改名）をハルと結婚させ、第2代の病院長に予定していた。神童との評判が高かった次男には、東大の眼科教授を期待したのであろう。このような達也の計画は、ある事故により頓挫した。それは、彼が1895年に落馬事故により急死したからであった。

⑧達也が急死したので、達七郎はドイツに急遽留学し、中継ぎとして達也の高弟であった阿部玄四郎を第2代病院長に迎えた。達七郎は、留学を終えて帰国した後、1898年に第3代の院長に就任。しかし、事態はこれで収まらなかった。それは、病院を託された達七郎が1902年に死亡してしまったからである。1909年に、井上達二が欧州留学より帰国した直後、28歳の若さで第7代院長に就任したのは以上の経緯があったからである。（**長男の達一**の消息は [261回の記事/f](#) に記載）その後、達二は1963年まで半世紀以上の長期間にわたり院長を務めた。その間、関東大震災や東京大空襲の被災から復興して、今日の井上眼科の隆盛があるのは達二の功績で、正に中興の祖である。

なお、井上達七郎の略歴は、[6）のサイト/1](#) に記載されている。それには、次のように書かれている。

井上達七郎氏（1869-1902）は、静岡県浜名郡篠原村に生れ（本姓中山榮太郎）、済生学舎に学び、井上達也氏に師事、その養子となり、達七郎と改めた。1895年ドイツ国ライプツヒ大学に留学、ケハイムラート・ザットレル教授に師事、1897年12月、ドクトルの学位

を得て帰国、井上眼科病院長に就任した。1898年5月14日、井上眼科同窓会を創立し、同年『井上眼科同窓会会報』第1号を発刊した。また、この年井上眼科病院夏期講習が初められ、これは眼科の講習会として、わが国最初の試みであった。

また、井上達也は徳島県出身の笠井通夫の俊英なるを愛し、養子として娘（清）と結婚させている（[\(7\)のサイト/0](#)）。私は本年の5月13日に東大医学部2号館3階大講堂前のホールに設置された9基の銅像を探索し、その探索記を[236回の記事/f](#)に記載した。上記9基の銅像の中に、井上通夫教授の胸像があった。私は「[歴史が眠る多磨霊園](#)」の記事に通夫先生の欄（[\(8\)のサイト/1](#)）があることを発見した。それには、次のように記載されていた。

井上通夫（1879.2.28－1959.6.4）は大正・昭和期の解剖学者、笠井与三平の三男として徳島県西尾村に生れ、後に井上達世の養子となる。1903年12月東京帝国大学医科大学を首席で卒業。’06年よりドイツ、フランスに留学、帰国後東大講師をへて、’14年『中間骨其発生及兔唇其他ノ研究』により医学博士の学位を受け、同大学助教授、教授（大澤岳太郎教授の後任）を歴任。’39年3月定年退官、その後日本歯科大学教授。口蓋の発生、兔唇、狼咽、顔面の形成についての研究では、世界的に知られている。特に’30年カザン大学（ソ連邦）創立125年祭に招かれて行った講演『口蓋の発生機構』は有名である。研究論文には「口蓋ノ発生ニ就テ」（東京医会誌、日本医会誌、十全会誌）がある。

上記の文で、「井上達世」はミスプリで、正しくは「井上達也」である。その時、私は「井上達世、又は達也」という人物を知らなかったので、通夫氏が井上眼科の養子に入ったことに、全く気付かなかった。兎も角、通夫氏は眼科医ではなく、解剖学者として成功されたのである。

（3）井上眼科病院の井上達二像と井上治郎像

井上眼科病院の玄関前には、2基の胸像が設置されていた。その写真を図3に示す。



図3. 井上眼科病院の玄関前に設置された2基の胸像。

図4 上左に井上治郎先生之像（図3で向かって左側の胸像）を、図4 上右に井上達二先生之像（図3で向かって左側の胸像）を示す。両像ともに、綺麗に整備されていた。病院の管理が行き届いているようだ。



図4. 上左：図3で向かって左側の胸像（井上治郎先生之像）、上右：図3で向かって左側の胸像（井上達二先生之像）、中：達二像背面の文書、下：治郎像背面の文書。

図4 中には達二像背面の文書、図4 下には治郎像背面の文書を示す。達二像には「紀元二千六百〇一年二月六日 門下生一同」とあり、治郎像には「2009年5月吉日 井上眼科病院 同門会一同」とあった。紀元2601年は、西暦1941年である。

治郎先生は2008年6月に亡くなられたので、1周年法要に治郎像が建立されたのであろう。それと同時に、達二像も整備されたようだ。[1\) のサイト/](#)には、達二像は団長が投稿し、治郎像は団員の飯塚さんが投稿している。これより、団長が投稿した時は2009年以前で、その時には治郎像は未だ無かったのであろう。



図5. 上：達二像背面の制作者サイン、下：治郎像背面の制作者サイン。

図5上には、達二像背面の制作者サインを示す。それには、「**日本光学 ステレオ写真彫像X**」とあった（Xは判読不能）。字体が古いので、本文の記載は戦前であろう。従って、達二像は1941年に制作されたものか、戦後になって再建されたものであるであろう。

図5下には、治郎像背面の制作者サインを示す（なお、本図では右側が上方である）。それには、「**謹製 ステレオ写真彫像**」とあり、制作者の名前や会社名が不明である。

ブロンズ製の銅像は、日本では明治時代から制作が始まった。当初は、芸術家が座主を見て手製で制作していた。そのため、銅像から座主や制作者の気迫は伝わるが、銅像が座主にあまり似ていない場合が少なくなかった。「写真のような銅像を作れないか」との要望に応えたのが盛岡勇夫氏である。[9\) のサイト/1](#)には、以下の記載がる。

1927年8月27日、東京朝日新聞、讀賣新聞の各紙が一つの発明を大きく取り上げました。この発明は当時、大変大きな話題となったのです。これが「立体写真像」です。発明者の盛岡勇夫は1893年に広島県で生まれ、中学校時代から写真の持つ迫真性の素晴らしさに惹かれ、これをそのまま「立体化」する方法を考え始めました。その後、1920年から本格的に「立体写真像」の研究に取り掛かり、3年後の1923年遂にその完成をみました。しかし、同年の関東大震災により全ての資料を焼失し再制作を余儀なくされ、再び発表するまでには、さらに4年の歳月をかぞえる事になったのです。

盛岡氏は1927年に立体写真像株式会社を創業、同社は現在までに2万基以上の立体写真像を制作している。同社の銅像は、まるで写真のように座主に似ている。強いて不満を言えば、座主の気迫があまり出ていない点である。私の乱歩欄では、同社の銅像を沢山取り上げている（例えば、[249 回の記事/f](#)）。しかし、私が「ステレオ写真彫像」と云う記載にお目にかかったのは、今回の井上像が初めてである。

「ステレオ写真彫像」の制作会社を調べてみると、東條会館や洗足商事株式会社などがあった。私は、[220 回の記事/f](#)で「東條会館謹製の安達建之助像（千代田区）」を紹介した。私が[185 回の記事/f](#)で、池袋の後藤守正・奈美子像を紹介した

時には、制作者として「山名常人氏と東條会館」の名前があった。私の銅像探索記には、他にも山名常人氏の銅像があったので、私は彼の略歴は調査済である。[10\)のサイト/b](#)には、次の記載があった。

山名常人は、1910年長野県飯田市滝江に生まれる。東京高等工芸学部彫刻部卒業、同年構造社展に初出品で入選。新構造社結成に参加し、多数の肖像彫刻に励む。ニコンに勤務しステレオ写真彫像を研究。戦後は美術教師を勤めた後、洗足商事株式会社に入社。彫刻家及び経営者として活躍。池田隼人首相夫妻、佐藤栄作首相夫妻、福田赳夫首相の胸像製作。大石内蔵助立像（赤穂御崎）、福沢諭吉像（慶大日吉キャンパス）、雪舟禅師立像（雪舟記念館）、柿本人麻呂像（柿本神社）、樋口一葉像（樋口一葉記念館）など多数の作品を残した。2005年逝去。

上記の記事により、私は以下の推測に達した。

- ① 井上達二像は、山名氏がニコン時代に制作したのではないか。
- ② 井上治郎像は、山名氏の逝去後、山名氏の手法を用いて洗足商事株式会社が制作したのではないか。

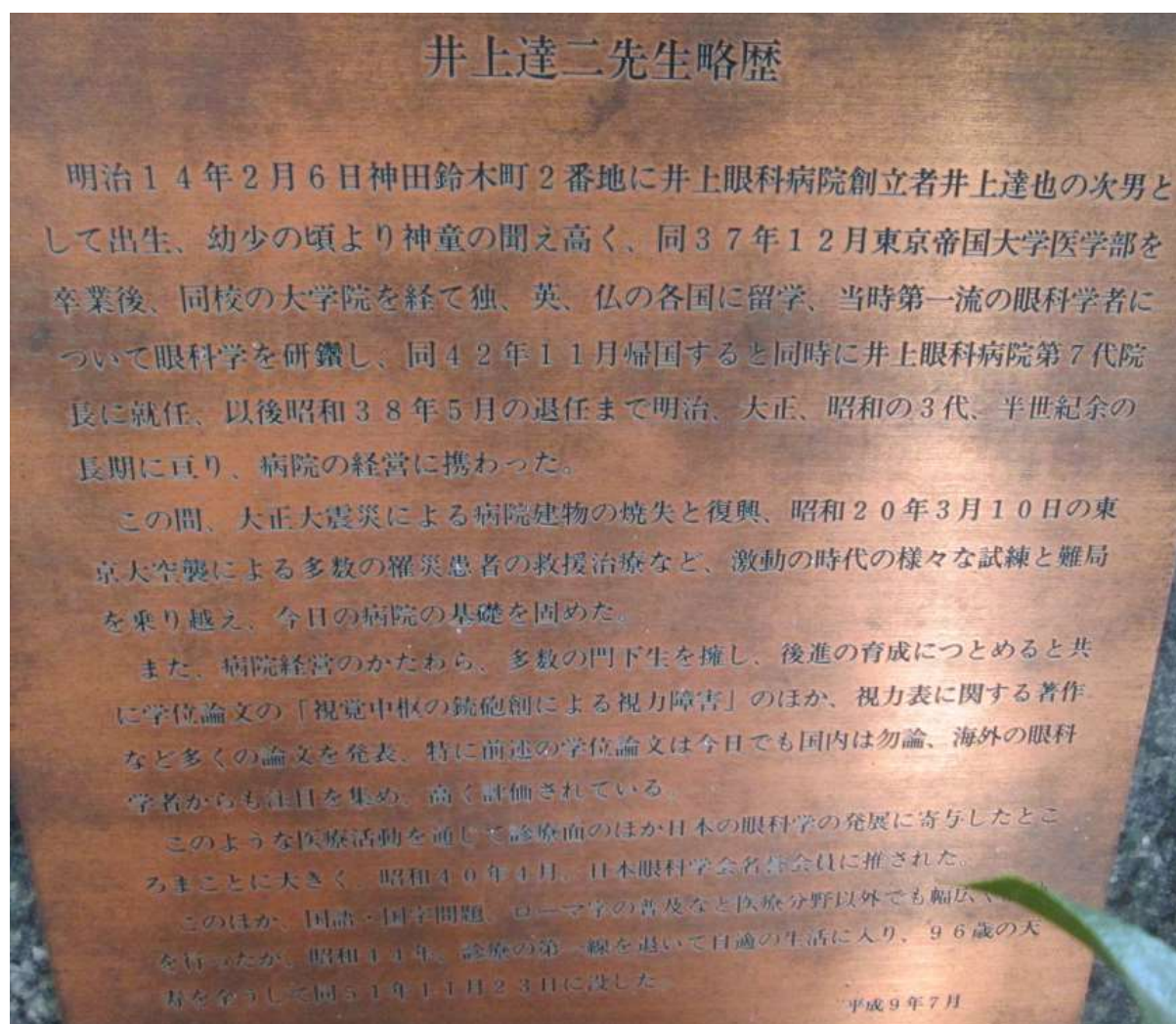


図6. 井上達二像の台座側面の銘文

図6に井上達二像の台座側面の銘文を示す。それには、次のように書かれている。

井上達二先生略歴

明治14年2月6日神田鈴木町2番地に井上眼科病院設立者井上達也の次男として出生、幼少の頃より神童の聞こえ高く、同37年12月東京帝国大学医学部を卒業後、同校の大学院を経て独、英、仏の各国に留学、当時第一流の眼科学者について眼科学を研鑽し、同42年11月帰国すると同時に井上眼科病院第7代院長に就任、以後昭和38年5月の退任まで、明治、大正、昭和の3代、半世紀余の長期に亘り、病院の経営に携わった。

この間、大正大地震による病院建物の焼失と復興、昭和20年3月10日の東京大空襲による多数の罹災患者の救済など、激動の時代の様々な試練と難局を乗り越え、今日の病院の基礎を固めた。

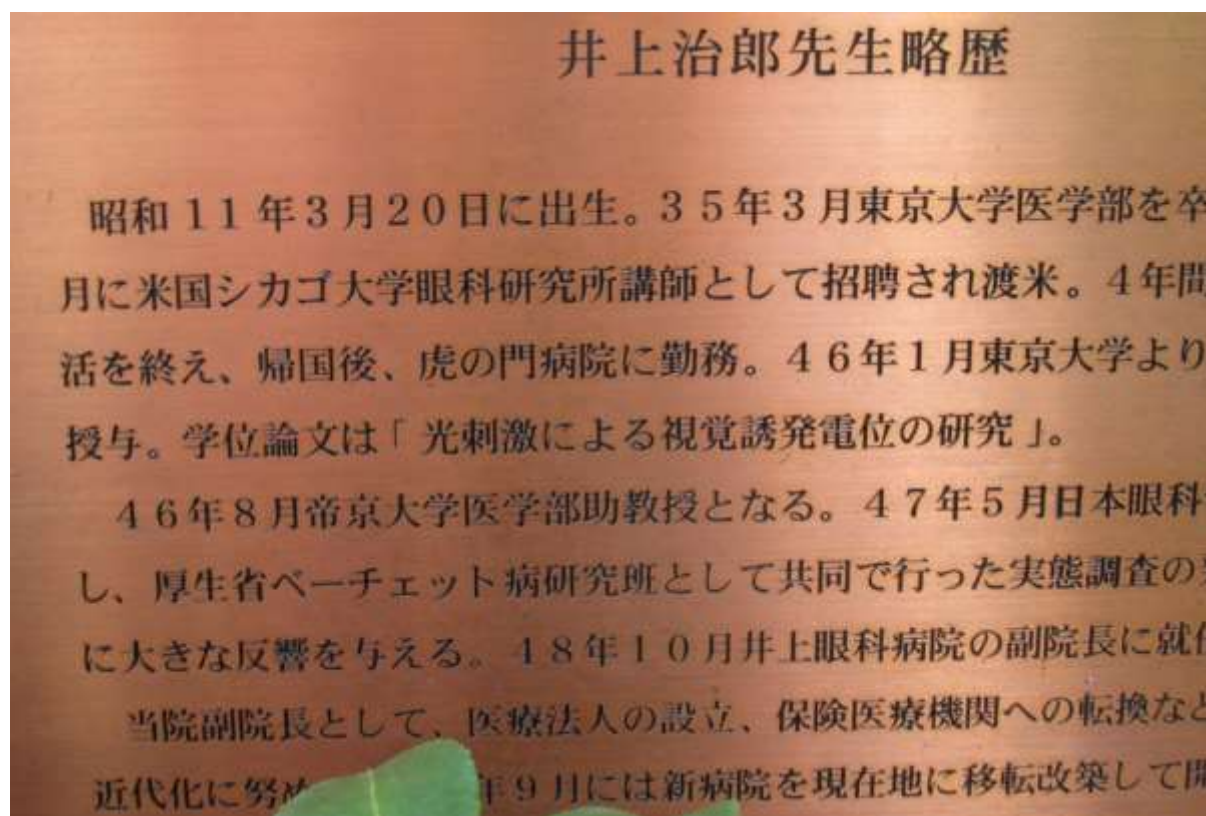


図7. 井上治郎像の台座側面の銘文

図7に井上治郎像の台座側面の銘文を示す。以上の資料などにより、井上達二像と井上治郎像の概要を以下に記載する。なお、「谷中墓地に眠る有名人の方々」と題する記事がある。その中に、井上達二・井上治郎の欄 ([11](#)) のサイト/m、谷中霊園甲4号7側、駐在所の横向かい。)がある。本欄を用いて、達二像と治郎像の「設置経緯」を記載する。(ただし、本サイトの「治郎欄」にミスプリがあり、「**帝国大学**」と書かれているのは、図7より正しくは「**帝京大学**」であることが分かる。)

井上達二先生胸像

設置場所：東京都千代田区神田駿河台4-3 井上眼科病院玄関前

制作者：日本光学ステレオ写真彫像

設置時期：1941年2月6日

寄贈：門下生一同

設置経緯：井上達二(1881年2月6日-1976年11月23日)先生は眼科医。井上眼科創立者井上達也の二男。東京出身。1906年陸軍衛生補助員。ドイツ・イギリス・フランスに留学し、眼科を研究。1909年帰国し井上眼科を継ぎ7代院長に就任、明治・大正・昭和にわたり長く院長を勤めた。1911年医学博士。1923年の大震災による病院の焼失と復興および罹災者救済に尽力。1929年欧米視察。1945年3月10日の大空襲による罹災患者1000余人の治療にあたる。兄井上達一・弟井上四郎ともに医学博士。夫人は、東京角倉正道の妹愛子。なお、8代院長は、長男の井上正澄。

井上治郎先生胸像

設置場所：東京都千代田区神田駿河台4-3 井上眼科病院玄関前

制作者：ステレオ写真彫像

設置時期：2009年5月

寄贈：井上眼科病院 同門会一同

設置経緯：井上治郎(1936年3月20日-2008年6月6日)先生は井上眼科第9代院長。東京都台東区出身。1960年東京大学医学部(眼科学)卒。1961年東京大学医学部附属病院眼科医局に入局。1966年シカゴ大学眼科研究科講師。1971年帝京大学医学部眼科助教授を経て、1973年済安堂井上眼科病院副院長。1981年9代目院長。東京都社会保険診療報酬支払基金専任審査委員も務めた。のち院長を退き、理事長選任。編著に「井上眼科病院に学ぶ眼科病院システムと診療のコツ」などがある。東京都功労者賞・教育文化功労賞などを受賞した。

参考資料

- 1) のサイト：<https://douzou.guidebook.jp/>
- 2) のサイト：<http://masaniwa.web.fc2.com/Ranpo.pdf>
- 3) のサイト：
<https://library.bunmori.tokushima.jp/digital/webkiyou/34/3422.html>
- 4) のサイト：
<https://www.inouye-eye.or.jp/media/inouye76.pdf>
- 5) のサイト：<https://www.inouye-eye.or.jp/media/inouye76.pdf>
- 6) のサイト：<http://ken-i-kai.org/homepage/index1804.html>
- 7) のサイト：<https://jahis.law.nagoya-u.ac.jp/who/docs/who8-1240>
- 8) のサイト：
http://www6.plala.or.jp/guti/cemetery/PERSON/A/inoue_michi.html
- 9) のサイト：<https://www.rittai.co.jp/annai.html>
- 10) のサイト：
<https://blog.goo.ne.jp/taktsuchiya/e/59a5b41d0aacf2f18c78a7393e3a622b>
- 11) のサイト：<http://ya-na-ka.sakura.ne.jp/inoueTatsuji.htm>